

説教 『最底辺からの赦しの祈り』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 53：11～12／ルカによる福音書 23：32～38

先週はどん底に沈められたペトロよりもさらに「低い所」から、彼を見つめるイエスの「まなざし(ルカ 22:61)」に注目した。イエスはそこから更に低い所へ、つまり十字架という低さにまで降った。

イエスの両脇にも十字架が建てられた。「人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた(23:33)」。十字架は苦痛を負わせながらじわじわ殺していくローマの極刑。手間もかかる見せしめ処刑であるゆえ、通常の犯罪では執行しない。両脇の者は、帝国の支配に抵抗する思想犯、もしくはバラバのように人気の高い解放運動家だったか(23:18～19)。イエスは帝国統治に抗ったわけではなく、ユダヤの、いわば身内の憎悪を受けて十字架刑となった(23:10～12)。

十字架上でイエスは祈った。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです(23:34)」。それにしても「彼ら」とは誰か。そこには民衆と嘲笑う議員(23:35)、侮辱する下級兵士がいた(23:36)。民衆の中には十字架を要求した民もいれば(23:21)、イエスを師と仰ぐ民もいる(23:27)。

己の罪に気づかない「彼ら(23:34)」とは、それだけか。祭司長や律法学者ら信仰の権威(23:10)、ヘロデ王とローマ総督のピラト(23:12)という世俗権力も加えられよう。また裏切ったユダ(22:48)、さらにイエスを理解できなかった弟子たちや、嘆きに沈む女たち(23:27)も含まれるかもしれない。省みれば「彼ら」とは、私たち自身のことではないのか。今なお「十字架につけられたまま(Ⅰコリント 1:23)」のキリストは、「父よ、彼らをお赦してください(23:34)」と罪の赦しを祈り、十字架の低さから人間を抱えておられる。ユダは直弟子だったが、「赦しの祈り」を知ることなく自死した(マタイ 27:4～5)。

預言者の言葉が思い起こされる。「わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った(イザヤ 53:11b)」。「多くの人を過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった(53:12b)」。女たちや霧散した弟子たちはその後、こうした預言と、十字架上の祈りを重ねながら、次第にキリストの復活を受容していくことになる(ルカ 24:7～12,36～43)。しかし、この時点では「父よ、彼らをお赦してください(23:34)」という祈りが、嘲笑されるばかりであった(23:35～37)。

十字架という最底辺からの「赦しの祈り」は、混乱と興奮の中で誰にも聞かれなかった。だがその祈りは、現実の事柄としてキリスト者に受け継がれた(使徒 7:60)。これは、弟子が学んだ教えを実践した、と言うより、「赦しの祈り」が聖霊によって弟子に根づいた結果だ、と解せよう。つまり「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられた(Ⅱコリント 5:19)」。「和解の言葉」とはそのまま十字架の出来事。「父よ、彼らをお赦してください(ルカ 23:34)」という和解の祈りを聞き届けた私たちは、この十字架を宣べ伝える。私たちにおいて生きて働かれる聖霊によって、十字架という「和解の言葉」を現実のこととして明らかにする。

世がどんなに暗かろうと、絶望がどれほど深かろうとも、底の底から私たちは祈られている。底の底から赦され、解き放たれている。暗闇は光を理解しなくとも、「光は暗闇の中で輝いている(ヨハネ 1:5)」。



【おまけのひとこと】

もはや善も悪もない 従順も背信もない 底にまで降りると 差異など数えられまい 耳を澄ませ
微かな祈りが聞こえないか 目を凝らせ 微かな灯が見えないか 闇があつてこそその 祈りと灯